

高齢化の進展に伴う「多死時代」を前に、政府は在宅医療の環境整備を急ピッチで進めている。しかし、みどりの際に主治医とつながらずに救急車で運ばれ警察の死体検査に回ったり、医師不在の離島では死亡診断書の交付が難しいために在宅での死がなかなか望めなかつたりという課題もある。死亡診断書交付に関する規制が緩和されると、みどりの場は変わるのだろうか。

(3面参照)

死亡診断規制緩和へ

ない。この間、診断書が交付されないと埋葬

南北160キロに島々が点在する鹿児島県十島村。トカラ列島の名

で知られる。住民のいる七つの島に診療所があり、看護師が一人ずつ常駐している。最も

人口の多い中之島に医師が常駐し、北部4島を巡回。南部3島は島外の医師が巡回する。

看護師対応限界

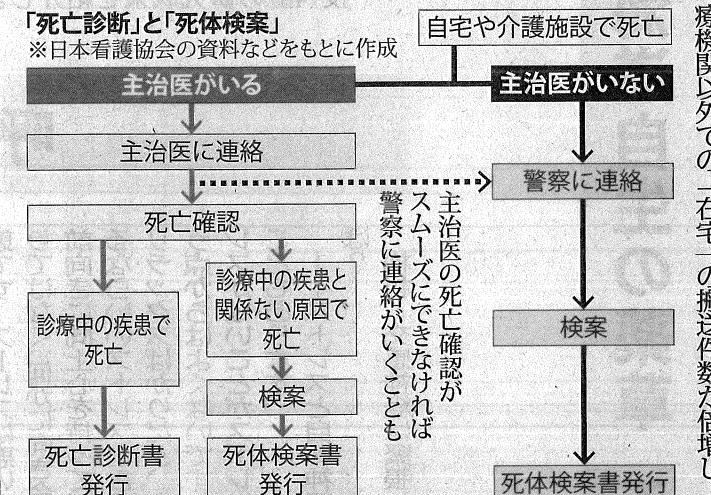
今年1月、島で60代の男性ががんで亡くなつた。亡くなる前に島外の病院などに移ることが多いが、男性は島での最期を希望した。幸い医師が駆け付けてみどりをしたが、船は週に2~3便しかなく、間に合わない恐れもあった。

この時は、村は緊急時に患者を島の診療所に運びテレビ電話で看護師が医師から指示を仰ぐ段取りを決め、容体の急変に備えたが、現時点では死亡の確認を確認するか、患者の遺体を島外に運び死を確認しなければならぬ。この時は、村は緊急時に患者を島の診療所に運びテレビ電話で看護師が医師から指示を仰ぐ段取りを決め、容体の急変に備えたが、現時点では死亡の確認を確認するか、患者の遺体を島外に運び死を確認しなければならぬ。

南北160キロに島々が点在する鹿児島県十島村。トカラ列島の名で知られる。住民のいる七つの島に診療所があり、看護師が一人ずつ常駐している。最も人口の多い中之島に医師が常駐し、北部4島を巡回。南部3島は島外の医師が巡回する。

医師不足の離島やへき地、都市部でも

みどりの現場 切実



死体検案書発行

死体検